
東京魔人學園 龍牙伝

零月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東京魔人學園 龍牙伝

【NZコード】

N1908B

【作者名】

零月

【あらすじ】

1999年、東京は東京寛永寺での世紀末の魔人達と凶星の者との決戦から数年後、新たなる宿星達の物語が始まる。

第壱話『継承者』

満月の夜、上空から降る無数の氷の矢を避けながら、青年《緋勇龍牙》はその先にいる一人の少女に視線を向ける

(どうして、こんな事に…?)

思考の中に意識が行つてしまつた為、回避が遅れ、自身に直撃しそうになる氷の矢を巫炎で相殺しようとしたが完全には相殺しきれず龍牙の体に掠る

「チツ、《火社》！…！」

初段の技ではダメだと判断した龍牙は南方を守る四神の名を冠する奥義へと発展する技の中伝に位置する炎で氷の矢を相殺し、地面を蹴り、相手を自分の間合いに捉えるべく、目の前の相手との距離を詰める

さて…どうしてこうなつたかと言つと話は当口の朝、否、正確には前日の夜まで遡る事となる…

何年も建ち続けた建物が持つ雰囲気を纏つた場所、与えるイメージは学校の校舎だろうか…？ 誰もいないはずの空間で彼、『緋勇龍牙』は三体の異形の影と戦つていた

「つー？ 待て！」

彼の叫び声を無視して、彼の放つ炎氣、巫炎の炎から逃れた影が龍牙の脇を通り過ぎ、その場から逃げ出していく

「一匹逃したか！？ はあ！」

逃げ出した影に意識を奪われた瞬間、襲い掛かつて来る別の影に対して、手甲を着けた右腕による裏拳で迎撃し、態勢が崩れた所に素早く体に乱打を浴びせる

「ラスト！ 雪蓮掌！」

最後に残った影に龍牙の冷氣を纏つた掌打が撃ち込まれ、相手の全身が凍りつき、そのまま崩れ落ちる

「『ど』に消えた？」

すでに彼に見つける事の出来ない距離まで逃れているのだろう、周囲からは、すでに異形の放っていた《氣》は存在しない

最後に残つた一体に逃げられた悔しさをぶつける様に足元に転がる凍りつき、まだ辛うじて形を保つてゐる、崩れ落ち砕け散つた異形
：《鬼》の頭を踏み碎く

翌日…

「…お前らしくないな…。」

登校後、教室に入った直後、友人であり、仲間である竹刀袋を持った青年『荒谷 亨夜』からの龍牙に対する第一声がそれだった

「つむせこ…。だつたら、お前も少しは協力しろ、結局、あれはあ
の後、『零斗』が倒したから、何も問題は無いかったけどな、お前
は何もして無いだろう！？

「…昨日は用事が有つてな。」

龍牙から視線を逸らしながら、亨夜は一言だけそう呟くと慌てて、
次の言葉を告げる

「そ、それより、零斗はどうしたんだ?」

「ああ、今日は休みだ。用事が有つて、一、二日休むとか言つていたぞ。」

龍牙がそう呟き、視線を前に向けると一度、始業を告げるチャイムが鳴り、慌てて亨夜も自分の席に戻つていく

(…眠い…昨日は零斗から連絡があるまで探し回つていて、疲れたんだよな…。)

「ふあ～…。」

龍牙は睡魔に対し、必死に抵抗したが、欠伸を上げて、心地よい眠気の中に落ちていった

授業の終了を告げるチャイムとそれと同時に起立る強音に目を覚ますと龍牙は壁にある時計で現在の時刻を確認する

(…一時間目の間、ずっと寝ていたか…?)

眠り足り無い等と考えながら、龍牙は立ち上がり次の移動教室である次の授業の場所である生物室に向かつ為に歩き出した、周りを見てみると大半の生徒が教室を出て、龍牙を含めて、すでに数人だけ

しか残つていなかつた

(急いだ方がいいか。)

ドン！

教室を出た瞬間、何かが龍牙にぶつかり、ぶつかった相手と彼自身が床に倒れる

(気が付かなかつた…？) 「えーと、大丈夫？」

龍牙は立ち上がりると目の前で倒れている、短く切りそろえられた薄い茶色の髪に冷たい印象を与える瞳を持つた少女に手を貸す

「……。」

少女は無言のまま、何かに怯えるような表情で彼を見ていると一人で立ち上がり、そのまま周囲に散らばっている荷物を持って走り去つていく

「あ、ちょっと…。その教科書、オレのなんだけど…。」

仕方なく、彼女が持つていかなかつたノートだけを持って龍牙は生 物室に向かう

(あまりいい気分はしないな…怯えられて逃げられるなんて…。ま あ、同じクラスみたいだし、後で返してもうえぱいいか。)

そう考へ、彼女が忘れて言つた教科書を拾い上げて、名前を確認する…その教科書には『氷川 弓』と書かれていた

そのまま当初の目的地であった、生物室へと歩き出す

「…後で亨夜を殴つとくか…。」

多少、理不尽ともいえる怒りを自身の友人の一人に向けながら…

これが究極の陰の力を背負う少女『氷川 弓』と、この世にある異質なる第一の黄龍の器『緋勇 龍牙』…その頃は、まだ自身に定められた重すぎる『宿星』を知らぬ一人の初めての出会いであった

翌日…

『ねえ、知ってる？ 昨日の放課後…。』

『被害者つて、三人とも、うちのクラスの女子だよな…。』

『確か、三人とも…。』

生徒達の視線が全て、一人の少女に向けられる、その視線に込められた意思は二つ、『好奇』と『恐怖』

前日の放課後、東京の学園と言つ場所で三人の女子生徒が重度の凍傷を負つて発見されたのだ、幸いにも一命は取り留めたが現在もまだ意識不明…それは未だに記憶に新しい、数年前の未解決の獵奇事件の数々を思い出させ、生徒達に恐怖を与えるには十分過ぎるほど の物だった

ただ一部、その事件の真実、それを間接的にとは言つても知つている者達だけは例外として…

「やっぱり、犯人はオレ達と同じ『力』を持った、『魔人』か。」

「…ああ、それ以外だと、状況的に考えられないだろうな…。この東京で重度の凍傷…なんて、状況はな…しかも、凍傷は体全体に広がっているのではなく、一ヶ所だけに集中した物が数ヶ所、確実に『力』を持った者の仕業だ。」

そこまで言いきつた後、亨夜は一呼吸置いて

「…それと、調べるのは本来なら、零斗の専門分野だ…生徒の尊以上の物は手に入りにくいから、それは理解していくくれ…。」

情報収集を得意としている零斗に対し、龍牙と亨夜は純粹な戦闘要員である、もつとも、それ以外にも得意分野は有るが…

龍牙の質問に対し、自分の考えを含んだ答えを告げ、得意分野でない事に対する注意を促すと一度だけ、龍牙に視線を向け、亨夜は周囲の視線を集めている少女を視界の中に捕らえる

「……真神学園一年C組、弓道部所属『氷川』……最後に被害者達三人と一緒にいた所を目撃されている……今の所、最有力の犯人候補と言つた所か。」

彼女の姿を視界の中に捉えると、龍牙の表情が一瞬だけ変化し、彼の口から、一言だけ呟きがもれる

「昨日の……。」

「知つてるのか？」

龍牙の表情の変化と呟きを捉えると亨夜は、龍牙にそう尋ねる

「ああ、昨日、廊下でぶつかって……間違つて、オレの教科書を持つて行つた……。」

「……それはまた、古いマンガみたいな出会い方だな……。」

「いきなり、怯えられて、逃げられるのがか？　そんなマンガがあるなら、一度読んでみたい所だ。」

「訂正しよう、お前……いきなり、睨みつけたとか……。」

「言つておくけどな、亨夜……。オレはその時、彼女を睨んでもいいし、怒つてもいいなかつたし、殺氣も出していなかつた。」

亨夜に変な誤解を持たれる前に龍牙が言い切ると、亨夜は疑問を浮かべながら、視線を真上に上げる

「…………変だな、『ぶつかつた奴は例外なく半殺し』、なん

て詫ひ悪い噂も無いし…考えられる理由が何一つない…。」

「お前が普段、オレをどんな目で見ていたのか…よーく、分かつた。亨夜…お前とは一度、ゆつくりと話し合つべきだな…旧校舎の地下辺りで拳と拳で…。」

「すみません、私が悪かったです、はい。」

龍牙から感じた自分に向けられている殺氣と彼の両腕に集まっている、「冗談ではすまないほどの『氣』に反応して、即座に謝る亨夜だった…曰く『あれは間違いなく、奥義クラスの技の一ツや二ツ、撃つてくる顔だつた』らしい…しかも、この時点で龍牙が会得している、奥義クラスの技は陰陽併せて一つだけとは言え、どちらもシャレにならないほどの破壊力を持つた技なので…現時点では龍牙の操る奥義に対する対処法のない亨夜には、ハッキリ言って、死を約束された様な物なのだ

後日、龍牙の奥義に対抗するために必死になつて剣掌の奥義を初めとする三つの奥義を会得するための特訓に励んだ亨夜の姿が目撃されたとか、されなかつたとか…

「そんな事より、今の時点で一番怪しいのは彼女と言つことだけど…他に犯人らしい人間は?」

亨夜に向けていた殺氣を消して、龍牙はそう問う

「…見事なまでに居ない…。…」ここまで来ると誰かが彼女に罪を着せる為にやつたんじゃないのかと思いたくなるほどにな…。」

「そつか。被害者達と彼女とは仲が良かつたのか?」

「…イヤ、オレが聞いた話だと、仲は良くなかった様だ…。噂を信じるなら…虚めを受けているそうだ。」

亨夜の話を聞くと龍牙の意識が一瞬だけ、思考の海の中へと沈んでいく…

（状況的に考えて、間違いなく、彼女がクロか…でも、何でんだ…？ オレの中の何かが…オレだけは絶対に彼女を疑ってはいけないと言つてごる。）

彼の心中に引っかかる何故だかハツキリとは分からぬ意識、初めて会った相手に対する物としては不適切とも言える、その感情の正体が何かは分からぬ

「…亨夜…悪いけど、今回の事件はオレ一人に任せてくれ。」

龍牙の意識が思考の中から戻ると、亨夜に視線を向けそう告げる

「…ああ…。」

そんな龍牙の態度を不審に思つたがそんな彼の感情の変化は無視して、亨夜は彼の言葉に対して、そう答えた

「すまない。それに噂の真偽を確かめる為にも、直接話してみた方がいいだろからな、理由もあるし。」

「…そつか…なら、今回の件は全面的にお前に任せよう…竜宮さんには、オレから報告しておく…。」

「頼んだ。それと、間に合つかは分からぬけど、今回の事件に関する調査を零斗に依頼しておいてくれ。他に犯人を捜すとしたら、情報が少なすぎる。」

「…分かつた…彼女に関してはオレも『道部の方から、情報を集めよつ、幸いオレは』道部の方には知り合いかい。」

「ああ。」

亭夜の言葉に対し、一言だけそう答えた

（あの感覚の正体…実際に会えば分かるか…。）

そんな事を考えながら…

放課後…今朝から、何度も彼女に接触しようとした龍牙だったが…
その度に彼女には逃げられていた…

（困ったな…話をするどいつもか…教科書も渡せない…。）

それから暫く、無言のまま考へ込むと龍牙の頭の中には、最終手段と並べべき一つの手段が浮かんできた

「はあ、仕方ないか…。」

龍牙はため息をついて、そう呟いた

(あまり、使いたくなかったんだけどな……いろんな意味で。)

夕方の屋上…周りに誰もいない事を確認しながら、外に出ると…短く切りそろえられた薄い茶色の髪に冷たさと何かに怯える様な印象を『『えり』』は安心した様に息を吐いた

「…………」

『『夕日はいいね…昼と夜の一瞬の狭間、僅かな時の中でしか見れないから、綺麗なんだよな。』』

今まで誰も存在していなかつた出入り口の正面に彼は存在していた、物音一つ立てず、気配さえも感じさせずに…

「…ああ、これは『氣殺』と言つて、氣配を消して氣付かれなくする技だから、それほど特別なことじやない。」

いや、そんな物が使える時点で、十分すぎるほど特別なのだが…

「…………」

怯えた様子を見せながら、龍牙から離れていく、弓に対しても龍牙はそこから、一步も動かさず口を開く

「教科書…ぶつかった時に君が忘れていた物を渡したかっただけだから、安心していい。何に怯えているかは知らないけどね。」

「…ありがと…。」

龍牙に視線を向けずにそつ答えると彼女は無表情のまま、冷たい視線で彼を睨みつける

「どういたしまして。」

そう一言だけ答えて、龍牙は夕日に視線を向ける

「…帰りたいんだけど…どういってください。」

「失礼。でも、その前に一つ聞きたいんだけど…昨日の事件の被害者達とは、知り合いだっただろ?」

「…同じクラスだから、知つていて当然でしょう…。」

目を閉じたまま、ドアの前に立つ龍牙を睨みながら、弓は答える

「…それもそうだ…。それを言つたら、オレも知り合いだしな…。じゃあ、質問を変えよ…あの事件の犯人は君だね?」

「ツー?」

弓の表情が驚愕に染まり、凍りついたように動かなくなる、今まで

無表情だった彼女が始めて、表情を変えた

「…確かに普通の人間に出来る事件じゃない…。」

「……。」

「…でも、君は…《冷氣》を操る《力》を持っている。違つか？」

何かに気が付いて、横に跳ぶと今まで立っていた場所に氷の槍が突き刺さっていた、それが一瞬でも遅ければ龍牙はそれで串刺しになつていただろう

「…そうよ…私がやつたのよ…。」

片手を龍牙に向けながら、彼女は小さく呟く

「…あいつ等が私を傷付けるから…なんで私が…私だけが辛い思いを…！… あいつ等が悪いのに…！」

泣き叫びながら放たれる氷の槍が龍牙の周囲に突き刺さるが、その場から一步も動かない龍牙にコントロールを失っている、氷の槍は彼に当たる事は無い、だが、一步でも動いたら、槍は無慈悲に彼の体に突き刺さつていただろう

「ムダだよ…。」

一步ずつ龍牙は彼女の元に近づいていく、床に突き刺さる槍が壁となり、視界を奪っていた時には気がつかなかつたが、彼女の全身から赤い陰の《氣》を発していた

「…そんな感情に任せた攻撃じゃ俺には当たらない…。」

狙いもせずに打ち出した所で無駄玉にしかならないのは当然の事だ、当たつたとしても、それは偶然でしかないだろう

「…貴方も私を傷付けるの…貴方も私を虐めるの…？」

突然、弓の口調が落ち着いた物に変わる

「…消えてなくなればいい…私を傷つける者は…死ねえええええ
えええ！…！」

彼女の両手に氷の弓が出現すると上空から、無数の氷の矢が降り注ぐ

「なに！？」

龍牙が後に跳ぶと彼を追う様に彼の跳んだ場所から、着地した場所まで一直線に氷の矢が突き刺さる

流れ弾となつた矢が周囲の氷の壁となつた槍に突き刺さり、それによく突き刺さり、砕け散る、純粹な殺意に操られた矢は、感情に任せて撃ち出された槍とは比べ物にならない事が理解できる

「《巫炎》！…！」

追撃として上空から降り注ぐ矢を迎撃するために《氣》を練り上げ、それを《炎》へと変換させる

彼が自身を守るように真上に展開させた炎の壁を通過し、勢いを殺

す事無く、氷の矢は龍牙に降り注ぐ

「クツ！」

右手に収束させた炎で幾つかを相殺しながら、矢を回避するが、その幾つかは致命傷にはならない物の彼の体に掠る

「チツ、『火社』！－！」

より上位の技で作り出した炎で降り注ぐ氷の矢を相殺し、床を蹴り、相手を自分の間合いに捕らえるべく、目の前の相手との距離を詰める

「！？」「来ないで！－！」

自分に向かつて来る龍牙に対して、矢を放つが彼の右手に纏われた炎によつて、消し去られ、彼の拳が届く範囲まで捉えられる

「イヤ！－！」

弓は慌てて後ろに下がるが

「悪い！」

そう叫び、龍牙の右手に『氣』が集中し、収束させた『氣』を撃ち出す技『掌底・発剣』を放つた

「ゲホ！」

発剣が直撃し、弓の体が吹き飛ばされる

「ん？」

龍牙の頭の中に一つの疑問が浮かんでくる、数日前のH.Rで聞かされた話を思い出し、弓が吹き飛ばされた場所に視線を向ける

「まづい……！」

床を碎くほどの勢いで駆け出し、龍牙は吹き飛ばされる彼女との距離を詰める

「間に合えー！」

手を伸ばして、彼女を掴もうとするが間に合つ事無く、落下防止のために取り付けられた金網に激突し、その衝撃で金網は自身の役割を果たす事無く、大地へと落下し、彼女の体はそのまま落ちていく（…良かつた…これで…解放される…。）

目を閉じながら、自身に訪れる死を受け入れようとした瞬間、彼女の体が空中で制止した

「え？」

目を開けた瞬間、彼女の視界の中に飛び込んできたのは、右手で辛うじて繋がっている金網を握り、開いている左手で彼女の右手を掴んでいる、龍牙の姿だった

「…どうして…？ どうして、私を助けるの…？ 私が死んでも、貴方には関係ないはずでしょ？ …死なせてよ…もう…。」

「……関係ない……オレが助けたいと思つたから助けた……ただそれだけだ。」

「そんなの……ただの……。」

「ああ、オレの血口満足だ。自分勝手といいたきや言えぱいー。」

壁を床に見立てて、それを蹴ると龍牙は弓を連れて屋上に着地する

「オレが助けるつて決めたら、相手が嫌がつても絶対に助ける、意地でも死なせない。……師匠の受け売りだけどさ。誰かを助けるなら、我儘な位が丁度いい、だそうだ。」

呆然とした様子で床に座り込んでいる『に明るい笑顔を向けて、そう言い切ると再び

「……どうして……？　なんで……。』の力の所為で私は……邪魔者扱いされてきた……友達も言葉だけ！！！　みんな私を傷つける、欲しくなかつたのに……こんな、力なんて……。」

泣き叫ぶ』の頭に『ポン』と、優しく掌を乗せる

「大丈夫……オレはお前を傷つけない……オレが守るよ……。」

「……え……それって……？　あ・・えーと……。」

夜の暗さで表情かがくれて、龍牙は気付いていないが弓は龍牙の言葉に顔を真っ赤にしていた

「そう言えば、まだ君から、名前を聞いてなかつたね。」

「う、うん…。私は《氷川》だ。」

「オレは…龍牙…。《緋勇 龍牙》だ。」

「龍牙。」

《緋勇 龍牙》、彼の元に集う第四の仲間、一いつの強大な《宿星》はこの場にて、その運命を交差させる

第壹話・完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1908b/>

東京魔人學園 龍牙伝

2010年10月12日03時55分発行